

能美市の「能美」の名が歴史上初めて現れるのは今から約1200年前の平安時代前期頃です。

当時現在の能美市周辺地域は越前国江沼郡に所属していましたが、西暦823年（弘仁14年）に越前国から加賀国が分国して、加賀国能美郡という新しい行政単位ができました。

当時の加賀国は、現在の北は津幡町から南は加賀市までを含む地域です。加賀国には下位の行政単位である郡が置かれました。北から加賀郡、石川郡、能美郡、江沼郡の四郡、さらに能美郡には郡の下位の行政単位である郷、能美（野身）郷、軽海（加美）郷、山上（也万加美）郷、山下（也万之多）郷、兎橋郷の五郷が置かれました。そして国の役所である国衙（こくが）がこの能美郡の野身郷に置かれました。この時に名づけられた「能美郡」という行政区画名が現在まで継承されているのです。

能美地域一帯は、古来より人々が生活するうえで環境の整った適地であったようで、県内でも「遺跡の宝庫」と言われるように、原始から近世に至る遺跡が密集しております。

とくに国の史跡である和田山・末寺山古墳群、秋常山古墳群はそのシンボルであり、その主人公である加賀一円を統治した大豪族たちは、開拓が容易で肥沃な地である能美の地にその政治拠点を置き、さらに東に白山、西に日本海、北に手取川を一望できる能美丘陵を彼ら自らの墓域に選び、後の加賀国、能美郡の政治経済基盤を築きあげたのでした。

「能美」とはおそらく、「物事を成し得るすばらしい力と美しい自然環境のある地」＝「新しい加賀国の政治経済の中心地としてふさわしい地」といった意味があり、当時の人々が新しい国づくりに対する意欲や誇りを表現するために旧来の「野身」を白山や日本海、緑多き平野を眺望しての「美しき能国（よきくに）」の「能美」に改称したものであると思われます。

能美市小長野町（旧寺井町小長野）地内の「小長野 C 遺跡」から出土した「能美」の文字が書かれた土器（須恵器）片



「能美」の他にも、「吉」「福」といった文字が書かれた須恵器などが200点近く出土しています。

